

平成 22 年度
はまなこ環境交流会
報 告 書



平成 23 年 3 月

はまなこ環境交流会の概要

(1) 目的

浜名湖の自然環境及び浜名湖流域で活動する団体、企業等の環境保全活動を一般住民に周知することにより、浜名湖の豊かな自然に感謝し、大切に守っていく意識を醸成する。

(3) 内容

■実施日時 平成23年3月5日(土) 10:30～16:00

■場 所 静岡文化芸術大学 南館 280中会議室

■内 容 **第1部 浜名湖地域の環境保全に関する情報提供**

- 自然環境データの紹介(NPO法人地域づくりサポートネット)
- 浜名湖環境保全活動調査の中間報告(東海まちづくり研究所)

第2部 リレートーク(環境保全等活動団体の発表・紹介)

- 浜名湖地域における環境保全活動の紹介
 1. はまなこ環境ネットワークの経緯と活動提案
 2. 佐鳴湖の自然に親しむ会
 3. 奥浜名湖観光連絡協議会
 4. NPO法人静岡県環境カウンセラー協会西部支部
 5. 静岡県EM普及協会EM倶楽部
 6. 静岡大学アメニティ佐鳴湖プロジェクト
 7. 天竜川漁業協同組合
- 地域や家庭で実践できる環境保全活動の紹介
 8. すまいるむら
 9. はままつ七万人のグリーンコンシューマーをつくる会
 10. たんぼぼの会

第3部 浜名湖地域の環境保全に関する講演会

- 演題:「遠州の野鳥」
講師:北川捷康氏(静岡県渡り鳥研究会 代表)
- 意見交換

第1部 浜名湖地域の環境保全に関する情報提供

(1) 自然環境データの紹介

NPO法人地域づくりサポートネット・山内秀彦

浜松市が平成21年度・22年度に実施している「生物多様性情報整備事業」を基に、浜松市域の中で浜名湖（天竜川を含む）の生物多様性の調査を紹介した。ただし、最終報告はまだであるため、中間報告として概要を紹介した。

- ・浜松市の自然特性
- ・市内全域、調査中！・・生物多様性情報整備事業
- ・浜松市内各地域の特徴・いきもの紹介
- ・課題と今後の方向性



この調査では、環境の特徴ごとに6つのブロックに分割し、72ヶ所の現地調査を実施している。

- ①遠州灘沿岸地域／②奥浜名湖地域／③天竜川扇状地域／④天竜川中流・都田川上流地域／
⑥天竜川中流地域／⑦浜名湖東岸地域

その6つのブロックの中で浜名湖と関係がある地域を紹介した。

●奥浜名湖地域

この地域は、浜名湖とその支湖、照葉樹の自然林から構成され、なだらかな低山地にはみかん園が広がる。浜名湖とその支湖は、ヒドリガモやサシバなど水鳥の越冬地として利用され、猛禽類の渡りルートとしても重要な地域である。竜ヶ岩洞、滝沢などの石灰岩地域の洞窟には、キクガシラコウモリなど洞窟性生物が生息。都田川河口部の汽水域にヒメイトトンボが生息。水田など里山環境に、ヤリタナゴなどの貴重な動植物が多数生息している。

したがって、固有の動物・植物群が多数存在し、生物多様性の保全上、非常に重要！

●天竜川中流・都田川上流地域

河川低地には水田が広がる一方、山地は棚田としても利用されている。都田川中流部には山地水辺性鳥類のオンドリや、カルガモ、マガモ等のカモ類が生息。渋川・枯山地区は静岡県渋川自然環境保全地域に指定されており、浜松市天然記念物のギフチョウや、蛇紋岩地帯の固有種であるシブカワツツジ、シブカワシロギクなど貴重な動植物が生息・生育している。

なお、渋川・枯山地区には、ギフチョウの食草とされる「ヒメカンアオイ」などが自生し、生態系の循環がなされている。

●浜名湖東岸地域

三方原台地から、浜名湖へ注ぐ伊佐地川などの河川に沿って起伏のある谷津が形成され、その崖線に沿ってコナラ等の二次林が残されている。市街地近郊の貴重な里山環境である。しかし、放置竹林による荒廃もみられる。汽水湖である浜名湖やその干潟には、多くの魚貝類・水鳥が生息している。

主な鳥類は、ウミネコ、カワウ、アオサギ、マガモ、シロチドリがみられる。
特徴的な植物は、ヨシ、ヒメガマ、ハマヒルガオ、ケカモノハシ
錨瀬干潟や、コアマモの生息場でもある。

●今後の取り組みの方向性

・「守りたいいきものたち」の選定

浜松市域に生息・生育するいきものの種数や状況を明らかにし、希少種【保護すべき重要な動植物種】を選定する。

・ホットスポットの選定

浜松市が今後、重点的に守るべき地域の候補地を選定する。

※ホットスポットとは・・・生物多様性の視点から、固有性が高い、あるいは、多くの種が確認されるなど動植物にとって重要性の高い場所のこと。

・里地里山、水域の保全

動植物にとって特に重要性の高い地域である里山・水域を重点的に保全する。

・外来生物への対応

外来生物の現状を把握し、生態系保護のために必要な対策を講じる。

・生物多様性はままつ戦略の策定

(2) 浜名湖環境保全活動調査の中間報告

(株)東海まちづくり研究所

～「住民行動により浜名湖づくり」の実現に向けて～

住民が主体になって浜名湖の環境保全を進めることを実現するために各団体がどのような活動をしているのか調査し、ラムサール条約の登録湿地を目指してどのような活動をしていくべきかを考える。

ラムサール条約に求められる3つの要素として①環境保全②賢明な利用としての観光産業③地域教育として環境学習があり、その3つがバランスよく連携活動していることである。

浜名湖環境保全活動調査として浜名湖流域での環境保全活動組織にアンケートやヒアリング。また、自治体、組織が発行しているパンフレットなど地域資源に関する資料の収集をした。

浜名湖周辺で活動している組織として NPO 組織、教育機関、企業、美術館・博物館、宿泊施設、商工会・観光協会などについての活動拠点分布を紹介。

環境保全に取り組む団体等は増えてきているが各団体の単独での活動には限界があることも感じていて、他の組織と連携をしながら活動していけるような「つなぎ役・仲介者」が必要になっている。その中で連携活動のひとつの提案として浜名湖のアオサ問題をテーマにした連携について提案していきたいと考えている。



第2部 リレートーク（浜名湖地域における環境保全活動の紹介）

活動団体相互の情報交換や活動の連携に役立てるとともに、一般参加者に浜名湖流域等で取り組んでいる環境保全団体をPRするために、活動発表を行った。

1) 浜名湖流域における環境保全活動の紹介

1-① はまなこ環境ネットワーク（発表者／代表 芥川知孝氏）

～浜名湖の環境保全のための連携活動～

はまなこ環境ネットワークの設立から6年を経過した。その中で、ネットワークの設立の経緯と当初掲げた理念を説明し、ネットワークが行ってきた各種事業の概要を紹介した。



昨年10月には浜名湖だけでなく、同じ県西部地域の団体との交流や連携も必要があると考え、生物多様性をテーマに「天竜川・浜名湖フォーラム」を開催した。

平成21年度、浜名湖の環境保全調査の一環でラムサール条約の登録湿地であり、浜名湖と同じ汽水湖でもある宍道湖・中海に視察調査を行った。宍道湖は、漁業や観光業も盛んで浜名湖と似た環境にあった。そこの市民グループ（斐伊川流域倶楽部）が国・県・市、学校、企業、地域住民などをつなぎ合わせて、「葦原の再生」などのプロジェクトを実施していた。浜名湖でも「住民行動による浜名湖づくり」を進めるために、はまなこ環境ネットワークが扇の要となって具体的な連携のプロジェクトを立ち上げて、目に見える形の事業展開をやっていく必要があると感じた。

そこで、浜名湖の困りもの「アオサ」の問題を解決するために、流域の行政や企業、観光、漁業、市民NPOなどが連携していく仕組みづくりに取り組むための提案をさせていただく。以前静岡県でもアオサの除去事業に取り組んだが、解決できなかった課題でもあるので、どこまでできるか見えなさが、そのために、地域で活動されている方々の意見を聞き、議論していきたい。

環境に対してのとらえ方として、時系列で自然に対しての衛生的問題、ごみの問題、公害問題と人に対しての環境生活の快適性（気候など）がある。これらをどのように連携して自然を利用しながら守っていくかを考えていく中で、浜名湖を「里湖」としてとらえ歴史的、文化的な循環型社会を知ってもらう。

かつて、浜名湖は海草（アオサ）をとって自然の肥料として使い循環型の農業をしていたので、循環型のひとつのモデルとして話をする。アオサは全国的に肥料として使われていて浜名湖では1950～1960年ごろ年間10万トンほどとっていた。アオサをとることでリンを1万トンほど回収できるので湖をきれいにして地域の環境、自然文化について循環させながら考えていきたい。地域の生活者が浜名湖に有害物質を流す→アオサを回収する→農業に使えたり、水がきれいになることで漁業や観光にも影響を及ぼすので各組織、団体の活動と連携が可能になると考えられる。

1-② 佐鳴湖の自然に親しむ会（発表者/高橋和彦氏）

佐鳴湖の自然に親しむ会と言っても夫婦で活動している団体である。月1回佐鳴湖の自然観察会に来てくれる人が会員である。自然に親しむことが会の目的。

佐鳴湖は渡り鳥の飛来地で中でもカモを多く見ることができる。約2000～3000羽。

人間目線ではなくカラスやカモなど生きもの目線でもらえたコメントで佐鳴湖の今を伝えるという発想がおもしろかった。（配布された参考資料あり。）

その他、小学4年生を対象にした「出前授業」をやった。

地球温暖化などの影響もあって佐鳴湖のまわりが生物たちにとって住みにくい環境になっている。陸に住むという珍しいホテルなどの紹介もしているので是非、会に参加して欲しいと呼びかけていた。

活動日時は、日曜日のPM1:00～3:00



1-③ 奥浜名湖観光連絡協議会（発表者/三宅淳子氏）

当協議会は、はまなこ環境ネットワークの資料にあるネットワークの三つの輪（自然・環境、地域コミュニティ、地域産業）のうち、特に地域産業、ビジネスに軸足を置いて取組んでいるという点で、本日集まった団体の中でも若干タイプが違うといえるかもしれない。浜松市への合併後、地域の個性がなくなっていくことがないように、引佐、細江湖、猪鼻湖といった奥浜名湖の観光振興が目的だが、〈着地型観光〉としていかに観光客を受け入れるか、プログラムをつくって地域のよさを発信している最中である。



現在取組んでいるのが〈浜名湖・湖北五山めぐり〉、摩訶耶寺、大福寺、方広寺、初山宝林寺、龍潭寺を巡るツアーを企画している。昼の時間でランチをとりながら、ツアー紹介の映像を鑑賞した。

<昼食をとりながらDVD放映しプロジェクターで鑑賞>

（各寺の概観、内部、景観スポットなどを分かりやすく紹介している）

奥浜名湖周辺は自然が残っていて名所もたくさんある。ぜひ一度ご覧になってもらいたいと紹介した。

1-④ NPO 法人静岡県環境カウンセラー協会 西部支部（発表者／寺田公一氏）

日頃は、はまなこ環境ネットワークの事業に参加者として参加している。今回活動紹介の機会を与えられたので、私が所属している環境カウンセラー及び環境カウンセラー協会が実施している事業内容を紹介させていただく。



まず、環境カウンセラーという仕事について、環境カウンセラーは環境保全に長年携わり、豊富な知識と経験を持つ人材として環境省の所定の審査を受け登録された方々である。

このカウンセラーは環境教育、地球環境問題、リサイクル・エネルギー、環境マネジメントシステム、その他様々な分野の専門家が登録されていて現在、4,500名が全国各地で活躍している。

この環境カウンセラーは事業部門と市民部門に分かれていて、事業部門としては企業など事業者を対象にカウンセラーする部門と、市民部門として地域、学校など市民を対象とするカウンセラーと大きく分け2つの部門からなっている。

そのカウンセラーの実施内容は、事業者部門として、ISO、エコアクション21などの審査を行う環境マネジメント審査部門及び環境関連業務のアドバイスを行う部門とで構成されている。

市民部門では、子供の環境教育、地域活動、自然観察などの指導を又、その他共通事項として環境講座の講師、環境に関するアドバイス、行政の環境基本計画策定などを行っている。

以上、環境カウンセラーの内容を紹介いたしたが、ぜひ興味のある方は環境カウンセラーになって活躍していただきたいと思う。

1-⑤ 静岡県EM普及協会EM倶楽部（発表者／山崎三郎氏）

私たちの団体は、EM菌の利用で河川をきれいにする活動を行っている。今日はEMについて紹介したいと思う。



EMとは有機微生物群のことで様々な汚れをきれいにして、腐敗菌を抑える働きを持っている。

水質浄化の過程で、EM菌はへドロの中のアンモニアやメタンの有害物質を餌として体内に取り込み、アミノ酸や糖類などの有用物質に変えて体外に放出をする。

EM菌によるへドロの分解が進むと植物性プランクトンが増えると共に魚介類も増えるので植物連鎖がよみがえって生態系が豊かになる。全国各地でEM菌を使った水質浄化の取り組みがされている。

EMダンゴは、旧浜名湖ユースホステルで私たちが作っている。活動は、毎月第1、第3

日曜日。そこで、EM菌のダンゴの投入と一緒にEM活性液の連続投入すると改善が早まる。EMダンゴというのは土とEM活性液で土ダンゴにしたものであるが、これを投入することにより改善が早まる。

この活動は浜名川の浄化、小学校でのプールの浄化に使ったりしている。以前の浜名川はヘドロで夏場は臭かったが、この活動を続けてきたら改善され、ミズオオバコの群生が見られるようになった。学校のプールも冬にEMを入れると夏前の清掃が楽になると評判で問い合わせが増えている。

今後も市町および学校関係からの依頼にこのEMダンゴを活用し、環境改善活動を図っていきたい。

1-⑥ 静岡大学アメニティ佐鳴湖プロジェクト（発表者／静岡大学工学部教授・戸田三津夫氏）

我々のことをあまりご存じない方もいると思うが、以前から水質汚濁が問題になっている佐鳴湖の浄化をめざした研究、地域活動に取り組んでいる。キャンパスから近いということもあり、佐鳴湖の水質や生物等からデータを取り、浄化方法を検討してきた。配布資料で、プロジェクトの主な研究テーマ、佐鳴湖の環境に関する概略、汚濁原因、有効と思われる対策を紹介した。



佐鳴湖の水質は、ワースト1から一昨年ワースト10になった。我々がどこまで貢献できたか分からないが、今後とも調査研究を進めていくので、協力してもらいたいと述べた。

今日は環境の興味ある方が大勢集まっていると思うが、学生にもよく言っているが「私は環境問題に取り組んで、これだけがんばっているんだ」と思わないように。我々は環境に負荷をかけて生きている。ゼロにはできない。半分にするのも難しい。そういう観点でやっていくしかない。焼け石に水、気休めかもしれない。しかし気休めでも、できることはできる。そうしたところから取り組んで活動している。

今回のまなこ環境交流会は、「浜名湖から天竜川・遠州地域の連携へ」をサブタイトルに掲げ、県西部地域の環境保全活動の情報交換やゆるやかな連携を目指して開催したことから、天竜川の現状について紹介した。

1-⑦ 天竜川漁業協同組合（発表者／組合長 秋山雄司氏）

天竜川漁協は、天竜川にすむ魚の環境を守り隊として、啓発活動や調査研究を行っている。今回は、昨年生物多様性COP10で紹介したパワーポイントを使って天竜川の環境について紹介。

天竜川は、過去の数値と比較するとよく判る。ひとつは、釣り人口が大幅に減少している点である。昭和 58 年頃は、26,00 人いたが、平成 17 年には 5,000 人程度にまでなった。釣り文化が衰退したと思っている。次いで、漁協の中身についてだが、大幅に縮小した。例えば、組合員数 (4,500 人→2,500 人)、採捕量 (11,000K g→400K g) がそうだ。このようなことから組合の財政は著しく悪化している。また、組合員の平均年齢は 63 歳。世の中同様、高齢化が進んでいる。



そして、河川環境のことに触れたい。環境は確実に悪化している。例えば、鮎の資源量の減少、および魚病の発生があげられる。これは鮎の冷水病に代表されるが、採捕量減少の要因のひとつとなっている。

また、ダム建設による土砂供給の遮断、川床の低下そして川の濁水化もあげておきたい。なかでも、川の濁水化はコケの生育を阻害させ、生態系に強く影響している。総じて、環境悪化とともに、人々の川への親しみがなくなっているとの認識である。

さて、このような状況下、どういった対策を施しているかを説明し、本日の結びにしたい。幾つかあるが、基本は、多くの人に川に親しんでもらうことにおいている。

例えば、

- 1) 新しい漁法を開発・啓蒙すること。現在有料である入漁料の無料化。イベントの実施などがある。多くの人が川をレジャーの拠点にして欲しいと思う。
- 2) 規制の解除。誰もが気軽に川を楽しんでもらうための環境整備の一環である。
- 3) 森・川・海の連携。4) 周辺都県との連携・・・などである。

こうしたことを着実に推進することにより、天竜川の活性と環境保全に貢献していきたいと思う。

2) 地域や家庭で実践できる環境保全活動の紹介

2-① すまいるむら (発表者/内山ゆきゑ氏)

浜松の子どもの命を守るために、真剣に環境について考えていかなければならない。子どもたちの生命がかかっている。子どもも少なくなっている世の中で、人間の子どもが危ないと思い、「子供環境劇団」(PAF) を立ち上げた。活動しながら、環境へのメッセージを伝えて行きたい。そして、7万人の笑い村をつくるのが目標である。



環境を学びながら、子ども達自らが劇団の活動を通して、表現して行くこと、若い人達の環境への関わりを強くしていくことをサポートしていく活動をしている。

活動の連携には、まず人。人と人がつながることが大切。そしてその情報をネットを使って発信していくことも重要であると考えている。

今月浜松のまちなかで、20才～30才のぐらいの人が中心となって「浜松がんこ祭」に参加・協力していく。身体と声と心を使って、私たちを取り巻く環境のかかわりを踊りで表現していきたい。そして、町を元気にしていきたい。

2-② はままつ7万人のグリーンコンシューマーをつくる会（発表者／内山康雄氏）

10年前、友達がメリットシャンプーを使っているとフケが出なくなった。出ない反面、これは体に良くないのではないかと思い、やめてみた。すると花粉症も治ってきた。周辺の環境を変えることでこれだけでも変わるものなのか、何か環境を大切にする手伝いがないだろうか。そんな思いで「はままつ7万人のグリーン集団」（はまぐりの会）に参加し、環境への意識を持つことを念頭に置いて活動している。

今、はまぐりはいなくなっている。皆の意識を変えることで環境が変わってくるのではないか。そこで、「グリーンコンシューマー」という環境に配慮した生活を選択する、世の中を変えて行こうという集団がある。

自分の耳で聞き、何かを伝えるそんな大人になりたい。「浜松ミミびよんず」というボランティア団体がある。そのような活動にも参加している。



2-③ たんぽぽの会（発表者／野中正子氏）

たんぽぽの会は、昭和58年に設立された会員25名の小さな会（消費者団体）。主な活動として、くらしのカレンダー(A4 1C/1C)を作成している。

くらしのカレンダーは、会の活動内容をカレンダーに掲載し、読んでもらい、暮らしの中で役立てていただき、ゴミとして捨ててしまわないようにエコに配慮している。

リサイクル、食と安全など自然環境全体の中から、まず自分たちができる身近なことから取組み、いままでの生活を少しずつ変えることからスタートした。食品添加物などを調べ、実験し、その結果をカレンダーに掲載している。

また、エコクッキング、リフォーム講座、水道水パックテスト(塩素他)などを行っている。野菜は調理する時、皮は食べる、皮をむかないものを買うなどのエコクッキングを心がける。抗生物質の少ない肉を選んで使う、調理後の生ゴミの片づけをどのようにするか、お茶のタンニンが体に及ぼす影響、地球温暖化、大気汚染、NO₂について調べ、カレンダーにまとめて無料配布している。



第3部 浜名湖の環境保全に関する講演会

●講師 北川捷康氏（静岡県渡り鳥研究会 代表）

●演題 「遠州の野鳥について」

今回の講演のテーマは、遠州の野鳥ということで天竜川と浜名湖について説明するが、中でも浜名湖を中心にとの話をしていただく。いろいろと考えたが天竜川と浜名湖では水空間がまったく違う。水が流れ、河川敷やダムによる植生が変化に富む天竜川は多様な野鳥が生息している。それに対して浜名湖は、周囲が護岸で囲まれ、水にどっぷり浸かっている鳥が代表だ。そうなるとカワウとカモしかない。



今回はカワウとカモの違い、カワウが害鳥と呼ばれる中で、どのような生態で、どういう付き合い方をしているのかについて話したい。

カワウとカモの違いだが、浮き方をみるとカワウは水から背中がちょっと出るだけだが、カモは上半身が3分の2ほど水面から出ている。カモは体から出る油で浮くが、カワウは水に潜るため体に油がつかない。そのため翼を広げて乾かしたりしている。カモに関する環境省の調査では、数多くいるカモのうち魚を食べるのは3種類、数にすると全体の0.5%程度と圧倒的に少ない。まさにカワウは魚を取るために進化



したといえる。静岡県内200ヶ所ほどで調べたカモの生息地ベスト5をみると、古人見が3千羽で最も多く浜名湖は約1500羽でベスト4、これは全県的にも多い。この傾向はカワウも同じだ。

1980年代以前に浜名湖でカワウの姿を見たという人はおそらく一人もいないと思う。それが現在、県内で1万羽以上いる。それが問題なのだが、初めて群れが確認された80年代からやがてねぐらやコロニー（営巣地）での繁殖が確認されるようになった。



カワウの糞はリンを含んでいるため、ねぐらやコロニーの木を枯らす。そこで木を伐採したところ、かえって周囲にねぐら・コロニーが広がったという話もある。カワウ対策を県単位でも仕方がないのは、行動範囲が広いからだ。ある調査では、親鳥は餌を取りに1日2〜30キロは当たり前、最大50キロまで飛ぶことが分かった。浜名湖から天竜川河口まで飛んでしまう。また巣立ったあと、かなり遠方まで移り住む。2002年に千葉の行徳で保護されたカワウに発信機をつけて行動範囲を調べたところ、霞ヶ浦のねぐらから浜名湖、愛知県をまわるルートが確認された。実に200キロ以上も移動している。浜名湖と愛知県のカワウの交流は頻繁で、それ以外でも行き

来していて千葉の印旛沼まで飛んだ例もある。

カワウは有害鳥獣として毎年 1200 羽程度が駆除対象となっている。一方で、水質汚濁も鮎減少の原因となっている。国は何億という予算を計上し、カワウ駆除以外にも河川環境の改善・回復、鮎の産卵場所の確保、放流方法の改善といった対策を進めているし、地元の漁業組合でも天然鮎の遡上促進に取り組んでいるのが現在の状況だ。

カワウの功罪について。“罪”の一つ目は、とにかく魚を食べること。二つ目はねぐら・コロニーの樹木を糞によって枯らしてしまう。“功”は、魚を食べることで水中のリンを陸上に運ぶ、これはアラスカのヒグマに言われていることだが、鮭を食べることで川のリンが糞として山に運ばれ肥料になる。ある地域では、カワウのねぐらの下にわらを敷いてリンを集めて肥料にして儲けたという話もある。また場所によっては益鳥になっている。桶ヶ谷沼ではトンボの生息地として知られていて、ヤゴを食べるフナの大敵であるカワウはトンボにとっては益鳥とみられている。時と場合によって害益の評価は分かれるという実態がある。

最後に、天竜川の遠州大橋南中洲で以前、あるものをみつけたが、それは“山芋”と“くるみ”だった。山奥の水窪のような所にあるものが採れたということに驚き、河口周辺地域の環境の変化に興味を持ったのがきっかけだ。かなり昔の人でないと分からないかもしれないが、天竜川といえば真白の砂浜に青い水という景色だったのが、今は見るができない。木が茂るようになって長くなるが、最近では下流全域の樹木の伐採が進められている。現在においては街から緑がなくなり川岸の植生がそれを支えていた面もあるし、防風林の役割もあったはず。渡り鳥に必要な一帯は伐採しないようお願いしたが、その影響はまた今後考えていかなければならないだろう。

■意見交換■

●講演に関する意見・感想：

川の森林化は鳥にとってはよいことだが、漁業にとっては意見が分かれる。堤防が内外にできて、防砂林もある、何十年前の景色に慣らされるどころがどうしてもある。昔はどうだった、今はどうだと、落ち着く先はどこなのか次の世代に伝え、残していけるよう考えていかなければ。

また鮎の放流は全国でやっているが、1匹 100 円位する場合もある。カワウに食べられると本当に悔しい。しかし、そもそも何故放流が必要になったのか、と考えればカワウだけの話だけではない。



●浜名湖のアオサ利活用研究の提案について

Q：県でも浜名湖のアオサ問題に関しては研究を行ってきた。

堆肥、料理開発など費用もかなりかけてやってきたが、予算的なこともあってやめてしまった。浜名湖全部のアオサを解決するには難しい。ネットワークの人たちが参加してマンパ



ワーでやることはありがたい。

A：予算もない中で行うアオサの利活用研究であるので、浜名湖全体の問題を解決することは不可能と考える。ただし、連携のテーマとしては、困っている人もたくさんいるので、関係する人が参加できることであると考えている。今まで出口（利用）で壁に当たっていた。

アオサのことを通じて流域住民への啓発になればと考えている。

今後ともいろいろ議論していきたい。情報ももらいたい。

●アオサの利活用研究について

以前、アオサにEM菌を使ってみた。EMを入れたアオサと入れなかったアオサを田んぼに置いて実験してみた。そうしたらEMを入れたアオサを鳥がつついて食べていた。一定の効果があつたと思われる。

活動の目標にして、実験してみてもいいが、あまりお金がないので、県から支援してもらいたい。



静岡新聞 3月6日朝刊掲載記事

■会場でのPR・展示コーナー



はまなこ環境ネットワークの取組み、浜名湖の生きもの紹介「浜名湖環境ライブラリー」

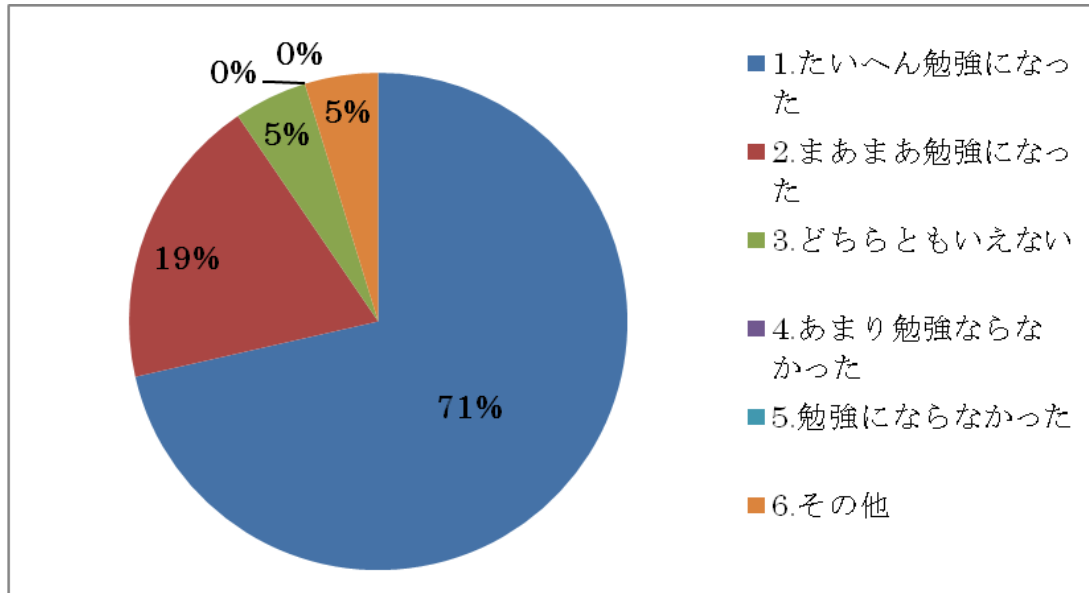


EM菌による水質浄化活動の取組みパネル紹介

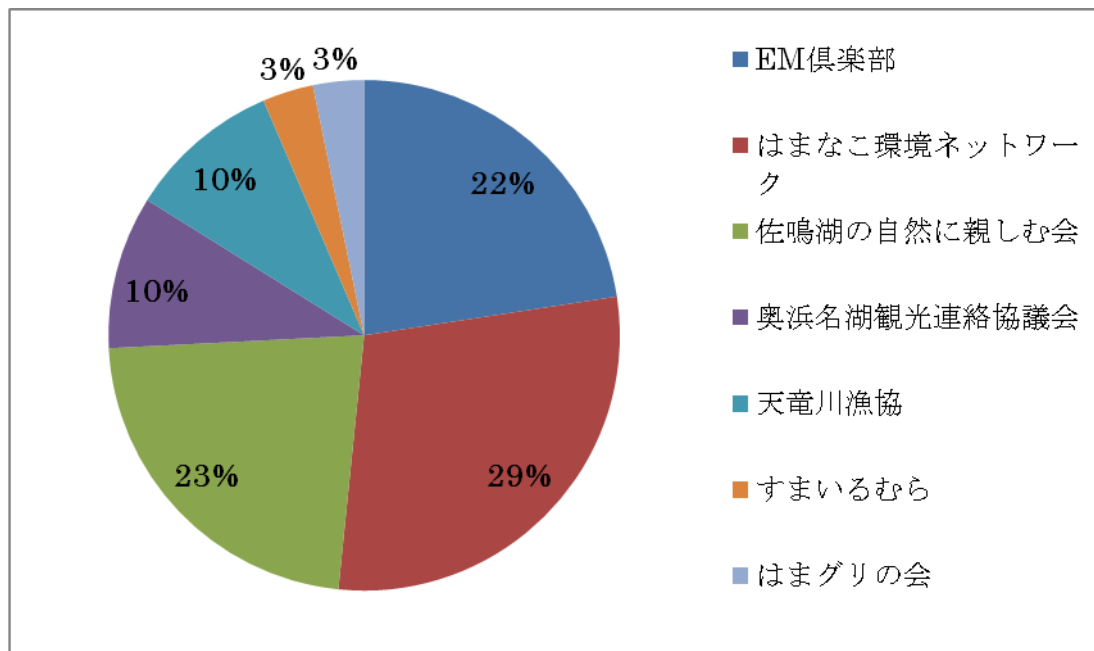
■参加者アンケートの集計結果

●アンケート回答者 21名（当日会場で配布・回収）

問1 リレートーク（活動発表）はいかがでしたか？



問1-1 活動発表の中で興味深かったものはどの活動でしたか？



問2 講演会で興味深かったことはどのようなことでしたか？

【講演会に関して】

- ・絶対的に害を及ぼす物というのではなくて、違う立場から見れば益になっていることがあるということ。
- ・カワウの生活空間(移動エリア)
- ・カワウとアユを改めて知り、投網の現状も知ることが出来た。
- ・カワウの生態系・・・五人回答
- ・野鳥関係者と漁協との意見の調整
- ・生態系の複雑さ？と、人間の生活との共存というものの難しさを感じましたが、両方を学ぶことで、深まる関心と理解によって、新しい選択へ踏み出すバランス感覚が持てるのかなぁと思いました。
- ・漁協の取り組み
- ・北川先生の鳥の話
- ・私の住んでいる新居町中之郷が鶺鴒のコロニーがあったこと、養鰻池の周りの松の木が枯れたこと、周りが鶺鴒の糞で白くなっている事を思い出されます。非常に興味がありました。
- ・カワウの飛行距離・・・すごい遠くまで飛ぶんだなぁとびっくりした。
- ・カワウを通して生態系が成り立っている面、すべてが害鳥ではないという認識を得た。
- ・カワウの生態(コロニーの環境背景)、うなぎの語源
- ・カワウと放流の話、木の伐採の話
- ・うぐいす
- ・天竜川の昔の姿に戻したいと思いました。
- ・天竜川と浜名湖の野鳥の生態に明確な後引きが出来るという話
- ・漁協との距離を取りつつ、歩み寄る連携トークが面白かった。
- ・遠州の野鳥・・・へら鮒釣り(趣味 40 年余)師として、「カワウ」の話はショックでした。
- ・浜名湖の野鳥

【活動発表に関して】

- ・EM 菌という菌を使い、水質浄化が出来るということに興味があり、又驚かされました。機会があったら又調べてみたいと思います。
- ・生ゴミ減量及び河川浄化

問3 浜名湖や天竜川などの自然環境保全に対するご意見・ご要望

- ・環境保全というより、皆が浜名湖を利用することができるシステムづくりを、ネットワーク事務局では行ってほしいと思った。
- ・森、里山、里田と湖・川はつながっているということを意識してもらえるような交流イベント。具体的な事業活動。(商品開発含む)
- ・広範囲で連携して共に考える必要があると思います。
- ・これを契機に永遠的(ゆるやか)なネットワークから、組織へと発展させて欲しい。地域を動かす大きな力となる。
- ・不特定多数の人が集まる場での交流会の開催
- ・アオサプロジェクトが進むといいですね。アサザプロジェクトみたいになれば・・・いいですね・・・天竜川にも、みんなで寄れるテーマを見つけて、横のつながりが広がっていくといいですね。
- ・アオサについての取り組みに興味を持ちました。活動が始まったら、是非参加してみたい。
- ・アオサプロジェクトの活動指針に興味があるので、従来の活動結果をまず知りたい。
- ・アオサ+EM やって見たら・・・
- ・浜名漁協が困っているアオサ除去に金を支払ってくれ。この感覚が不満。
- ・大変広域な問題です。
- ・昔の状態に早く戻してやりたい。
- ・私も EM で昔の自然を取り戻して、次の時代に継いでやりたいと思っています。
- ・お金の問題よりも人の心の問題なので、みんなの気持ちが動くことが重要だと思います。そのような活動を続けていかれることに期待します。
- ・どんな姿が理想なのか・・・簡単でいいが、具体的なイメージがあるといい。
EX:漁がいろいろな種の魚がいる湖→リンをなくす。隠れ場を作る。アマモを増やす。
- ・天竜川の木をほとんど切ってしまったことには、大変残念に思いました。その木の周辺にも小さな生き物が生息していたのに考えさせられます。
- ・行政の協力を得る方法を考える必要を強く感じた。
- ・関心のある方々が大勢いると感じた。
- ・大切な自然を守っていかねばいけないと感じた。そして、実践するために出来ることから取り組んでいきたい。このような会は大切。
- ・それぞれの活動予定を案内してほしい。
- ・環境情報を配信してほしい。又投稿欄を設けてほしい。
- ・専門家や活動している人はともかく、やはり一般市民の意識が低いのを何とかしないとけないと思う。